

「満州国」の新京医科大学についての一考察

周 軍

はじめに

周知のように、一九三二年三月、関東軍は清朝最後の皇帝溥儀を利用して、傀儡国である「満州国」を樹立した。「満州国」は、柳條湖事件の影響で大きな破壊を蒙った東北地方の教育、とりわけ小中学校を中心に徐々に復旧を図ったが、高等教育機関は、財政的困難を理由に閉鎖したままにしていた。¹⁾

「満州国」が本格的に高等教育の再編にのりだすのは、一九三七年五月に独自の学制を公布してからのことである。一九三八年に新京医学校、哈爾濱医科専門学校、哈爾濱齒科学校、奉天医科専門学校がそれぞれ新京医科大学、哈爾濱医科大学、哈爾濱齒科大学、奉天医科大学に昇格し、「満州国」の大学は九校となったが、そのうち四校が医学関係の学校であった。このことは、「満州国」が如何に医学教育を重視していたかを物語っている。

「満洲に於ては、御覽の通り、衛生開発は、急務中の急務で正に緊急の状態にある。仍つて医学者を何れの国よりも更に要望して居る。他国に於ても、医者に依るところ大なるも、特に満洲国に於ては他の何れの国より大である」という関東軍の軍医部長梶塚中将の発言から、「満州国」が医者3)の養成機関としての医科大学を優先的に設置した背景を推察しうるであろう。

ところで「満州国」の医科高等教育に関する研究はこれまであまり進んでおらず、新京医科大学についても、修業年限、入学資格、教師と学生の人数など、ごくわずかなことしかわかっていない。本稿では、戦前に一冊しか発行されなかつた貴重な資料である新京医科大学の学友会誌「圭泉」を利用して、新京医科大学の特徴、学生の想い・心境について考察していきたい。

一・新京医科大学について

新京医科大学の前身は、一九二八年に張明濬によって創立された官立の吉林医学校である。張明濬は吉林督公署軍医処長で、陸軍上校（中佐に相当）であり、盛京医学校の卒業生でもあった。

一九三一年九月十八日におこった柳條湖事件前の吉林医学校の教授陣は以下のようであった。

生理・内科	郭 路加	盛京医学校卒業
病理・解剖・産科	徐 漢昇	盛京医学校卒業
外科・薬理・治療学	李 〇〇	盛京医学校卒業 (名前は不明)
細菌	馬 鉄英	日本留学生
診断学	耿 応麟	日本留学生
衛生学	祖 興甲	北洋軍医大学卒業
臨床外科	劉 公樸	南満医学堂卒業
皮膚科	呉 〇〇	南満医学堂卒業 (名前は不明)

吉林医学校の卒業生は、東北軍の軍医や公立病院の医者などになることが期待されていた。吉林省医科学学校の第一期生五十名が一九二八年に、第二期生五十名が一九二九年に入学した。しかし一九三〇年と一九三二年には学生を募集せず、

一九三三年に第三期生（人数は不詳）が入学している。

「満州国」の樹立後、吉林医学校は民政部によって吉林国立医院付属医学校に改称された。張明濬は民政部衛生司司长に転任し、後任の校長に日本の長崎医科大学医学博士青木大勇が就任した。一九三六年九月、吉林国立医院付属医学校には九十三名の学生と二十名の教職員がいたが、この学校は一九三六年末に新京（長春）へ移転し、名前も新京医学校に変わった。

一九三七年五月に学制が公布され、新京医学校は大学に昇格し、名称も新京医科大学へと変わった。これに伴って、一九三七年の新入生が第一期生となり、一九四五年八月、「満州国」の崩壊まで合わせて九期の学生が新京医科大学で学んだ。

一九三八年四月には「満州国」の教育行政が文教部から民生部に引き継がれ、民生部のなかに教育司が設けられ、その下に「学務科、国民教育科、高等教育科、大学教育科」が設置された。新京医学校は民生部大学教育科の直轄となり、一九三八年六月、民生部令第六八号によって「新京医科大学規程」が公布された。

それによれば、新京医科大学の修業年限は四年で、学年は一月一日から十二月三十一日までで、新京医科大学に進学するには、国民高等学校、女子国民高等学校の卒業者か、それと同等の学力を有することが必要であった。

新京医科大学の教職員のうち、日本人教職員は一九三八年に十五名、一九三九年に二十一名、一九四〇年に三十名で、中国人教職員は一九三八年に五名、一九三九年に七名、一九四〇年に三名であるのに対して、一九四〇年の日本人学生は七十五名にすぎず、中国人学生が二二三名と圧倒的に多かった。

「私は中学校で少し日本語を習い、又夜学で半年ぐらい習いました。入学した時われらの日本語のレベルが低いので先生達の講義を聞き取り「れ」ません。始め先生達は黒板に一字一字を書く、私達は書取る。先生達は大変御苦労様でした。そして段段と聞き取り、書けるようになりました」と、一九三四年に吉林医学校に入学し、一九三八年に新京医科大学を卒業した王瀛が回想しており、吉林医学校時代から日本人教員が日本語で授業を行っていたようである。日本人教員に限らず、衛生学を教えていた中国人教員の郭松根も、日本語で授業を行っていた。

なお、一九四四年、新京医科大学の教員は、以下の通りである。

学長 山口清治
外科学 入江義一 伊藤明
薬理学 伊藤亮一
解剖学 瀧津久次郎 李継碩
生理学 矢野真琴 阿南秀一

病理学 山本義男 森田棍太郎 馬懐珂
衛生学 郭松根 橋本元文
内科学 高木斌

二、「圭泉」の創刊号について

一九四一年八月二〇日に新京医科大学の学友会の機関誌として「圭泉」が発行された。この名称は大学の寮の名前を借用したものであった。

「圭泉」刊行の目的は、以下のものである。

本来文芸部発行の分としては、純文芸方面を担(担)當し、別に総務部より学報を刊行し、研究、各部報告等の發表に備へるが理想なるも、現下非常時局に際し、一枚の紙も国家の重大資源たるに思ひを致さば、一年一回の會誌發行も幸の至り、この一書に權威ある學術的論文、優秀なる文芸作品、光輝ある各部の戦跡案内を満載され、満洲に於ける指導的医学雑誌の域に迄到達致す様努力して頂きたい。

「満州国」の「指導的医学雑誌」をめざして創刊された「圭泉」の目次は次の通りである。

【圭泉】の目次

(数字はページ数)

表紙題字 会長 山口清治
扉 民政部大臣 谷次享
巻頭言 会長 山口清治 一
所感 岡崎一武 三
講演 関東軍軍医部長 梶塚中将 五
随感の部
医師の勉強 飯尾純三 九
東洋医学の将来 村山実 一一
語学熟練法 郭松根 一三
讀書に関する雑感 上田正生 一七
巡察 正保秋夫 一九
射の心 山之内清 二四
研究の部
麻薬慢性中毒に就て 伊藤亮一 二七
電子顕微鏡 坂下五郎 三三
夏季興安東省莫力達瓦旗驅細施療班報告 森田梶太郎 四〇
朝鮮に於ける風土病 千原憲 五一
生物学家的優生学与社会学家的境優 王者欧 五六
創作の部
女 金光鉄雄 五九

随想の部

噂と妻 初子崎幸平 六五
蜺 葉渡逸吾 六八
随想の部
現実と理想と野心 長嶺晋吉 七〇
学園の理想 長嶺晋吉 七二
黒死病偶感 十川和夫 七三
我等の魂 幽良 七五
失眠 趙開慶 七六
山の上 徳山徹雄 七七
曠野 十川彌茂 七九
川柳と医者 大賀勝 八一
笑 松本義隆 八四
此も御殿医の一人 波良小佐一 八五
連絡船 紀平良夫 八七
汝自身を知れ 清水緑陰 八八
寄影 伴柳 九〇
入院 靈石 九〇
憶 流浪 九一
生之泡沫 泰莽 九四
黄金之謎 孟浪 九五
途中 沈諦 九八
旅行断想

道後へ旅して	池田満洲男	一〇一
奉山線案内記	太田義英	一〇四
ハルビン旅行断片	大川憲三	一〇五
訪日修学旅行帰国後成言	王家凱	一〇七
故轍	無名	一〇七
防疫余歴			
あるベスト流行の日	伊藤常秋	一〇九
康德七年防疫鱗片生活	王家凱	一一四
詩歌類薦			
倫理	曙雲	一一八
世の中	カレロ	一一八
我が校	天野一平	一二〇
大地	前田まさのり	一二〇
古代の血、映画「SESSU」より	前田まさのり	一二〇
四季	松本義隆	一二〇
若人	松本義隆	一二〇
満ソの界	松本義隆	一二一
沸いた涙	張国臣	一二二
杏林に学お	宮村研	一二三
無題	素歎嬪	一二三
新京医大「学徒の賛歌」	波良生	一二三
朝鮮詩五章	秦楓 朴龍喆	一二四

我的夢	辛石汀	一二五
春月	朱耀翰	一二五
春之於猫	李古月	一二六
五月	李秉狂	一二六
春底心	昨非	一二七
中秋節誌感	韓弘	一二七
寄情	豈凡	一二八
失題	燕生	一二九
曲歌	燕生	一三〇
孩子	克達	一三〇
帰来	克達	一三一
五月底雨	小林木子	一三三
秋底尾巴	小林木子	一三三
想	小林木子	一三四
松江辺的詩	小林木子	一三四
黑夜	小林木子	一三五
松江即景	高守義	一三五
各部報告			
総務部		一二七
康德七年度陸上競技記録		一三七
陸上訓		一四一
音楽に就て		一四二

武道部	一四三
庭球部	一四七

圭泉発刊に就て
編集後記

上掲の創刊号「圭泉」の内容をおおまかに説明すると、「巻頭言」、「講演」の二つの文章は「満州国」と学校側の要望を示しており、「随感の部」は医学の将来、勉強の方法などのような教職員の感想文で構成され、「創作の部」の三篇の小説、「研究の部」、「防疫余歴」の文章は、おもに専門の研究や社会活動に参加した学生の体験記であり、「随想の部」、「詩歌類薦」には学生たちによって恋愛や趣味、生き方、社会との関係など希望や悩みが記され、そのほかに「旅行断想」や「各部報告」がもりこまれていた。

三、新京医科大学の特徴

表①「満州国」の医科専門学校・大学の学生概況表（1937年～40年）^⑧

	入学志願者		計	入学者		計	入学競争率
	男	女		男	女		
1937年12月							
新京医学校	216		216	94		94	2.3
哈爾濱医科専門学校				不明			
哈爾濱齒科学校				不明			
奉天医科専門学校	100	30	130	15	6	21	6.2
1938年12月							
新京医科大学	554		554	64		64	8.7
哈爾濱医科大学	236	73	309	65	11	76	4.1
哈爾濱齒科大学	56	44	100	47	42	89	1.1
奉天医科大学	98	27	125	15	5	20	6.3
1939年12月							
新京医科大学	638		638	91		91	7.0
哈爾濱医科大学	392	83	475	102	10	112	4.2
奉天医科大学	123	37	160	19	5	24	6.7
1940年12月							
新京医科大学	1300		1300	77		77	16.9
哈爾濱医科大学	606	124	730	131	29	160	4.6
佳木斯医科大学	567		567	80		80	7.1
哈爾濱開拓医学院				24		24	
斎森哈爾開拓医学院				20		20	
龍井開拓医学院				35		35	
奉天医科大学	92	34	126	19	6	25	5.0

注：1939年12月の統計では、新京医科大学特修科には1名がいたが、ここでは計上しないこととする。また、大学予科もここでは除外する。

表①の示すとおり、新京医科大学の入学競争率は一九三七年の二・三倍から、一九三八年には八・七倍、一九三九年には七倍、一九四〇年には一六・九倍と「満州国」のほかの医科大学より次第に厳しくなり、入学志願者も年々増加しており、新京医科大学の人気ぶりを反映している。

仰げ建国我等が都、白雲なびく南嶺に

ひかり尽きせず、幸はゆたかに

青春はてなき、希望と愛にみてる

こ、ぞ我等が永久なる道場^①

この詩から、新京医科大学で学ぶことの喜びと将来への希望に満ちあふれた学生の想いを見出すことができる。また別の学生は、「世界に類例無しと聞く、大満洲の最高の学府」^②と、新京医科大学を詠っている。これらの詩から学生たちがどのように新京医科大学をイメージしていたかを推察することができようであろう。

ところで、新京医科大学の授業料は年間六十元であったけれども、卒業後「五年間指定された場所で勤務」すれば、授業料が免除され、月に五十円の「手当」まで支給されることになっており、それに「魅力」を感じて入学する学生もいた。^③

表②「満州国」の医科大学の卒業生進路の内訳（1937年～39年）^④

1937年12月																	
	卒業生 合計	官吏		公吏		軍人		銀行会社 員・実業		医員 医師		留学		学術研究		その他	
		計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合		
新京医科大学	32	11	34%	2	6%	7	22%			8	25%			4	13%		
哈爾濱医科大学	56									46	82%	1	2%	1	2%	8	14%
哈爾濱歯科大学	240	7	3%					2	1%	8	3%	12	5%	146	61%	65	27%
奉天医科大学	13									13	100%						

1938年12月																	
	卒業生 合計	官吏		学校職員		軍人		銀行会社 員・実業		医員 医師		留学		学術研究		その他	
		計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合		
新京医科大学	72	4	6%	1	1%	3	4%			53	74%			11	15%		
哈爾濱医科大学	63									61	97%	1	2%			1	2%
奉天医科大学	13									13	100%						

1939年12月																	
	卒業生 合計	官吏		公吏		軍人		銀行会社 員・実業		医員 医師		留学		学術研究		その他	
		計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合	計	割合		
新京医科大学	46	25	54%	10	22%	2	4%	5	11%	3	7%					1	2%
哈爾濱医科大学	114	47	41%			5	4%			43	38%	1	1%			18	16%
奉天医科大学	41									41	100%						

注：1938年以降、哈爾濱歯科大学は哈爾濱医科大学の歯科になった。

表②から明らかのように、新京医科大学の卒業生は「満州国」のほかの医科大学に比べて、官吏になる割合が高い。官

吏になるには、「満州国」の「高等官試験の選考試験」に合格し、官吏養成機関であった大同学院で半年間程度の訓練を受けなければならなかった。ところで、当時「満州国」の医療政策は「主に官・公立病院の発展に重きが置かれ」ており、「公立病院の医師と薬剤師はすべて『満州国』の官吏」であった。新京医科大学の卒業生が「官吏」になる割合が高かったのは、卒業生が官・公立の病院に多く配属されたことを意味している。この点も新京医科大学に人気があった理由であった。

厳しい試験を突破して入学しただけに、「たまに聞〔き〕漏らす事があります。ノートの内容を正確に保つ為、授業が済むとすぐ四、五人が一緒にノートを対照する。書損なつた所を改める」とのべているように、学習態度はたいへんまじめであった。学生の教員に対する評価も、「始め先生達は黒板に一字一字を書く、私達は書取る。先生達は大変御苦労様でした。そして段段と聞き取り、書けるようになりました」と、中国人学生にいてねいに教授し、できるだけ多くの知識を伝授しようと工夫する日本人教師に対する感謝の気持ちを込めた文章もあつた。

新京医科大学の教員は授業だけでなく、一九三六年に新京医科大学の付属病院として創設された新京市立病院でも「臨床実際を指導」していた。前述した王瀛は伊藤亮一教授の診

療ぶりについて、「患者を熱心に真面目に診療を致します。特に中国人患者に対する感情深く、中国人の生活水準を理解の上、中国人の診療費を優遇〔する〕措置を採用致します。重症患者を学用患者として直ちに入院させて手術をなされ、患者の命を〔が〕助かる」と、伊藤の中国人患者に対する配慮を高く評価している。

新京医科大学で日本人学生と中国人学生がどのような関係にあつたのかは明らかではないが、ある日本人学生が、「地理的に人文的に民族的に将又風土的に満洲国と中国との境する長城の一角に立つて日本人に負された使命の重大さを想ふ事も一つの意義有ることである」とのべているように、多くの日本人学生はこのような優越意識を持つていたものと思われる。ある中国人学生は、「入学したら予科生と言われ、帽子に黄色の筋をつけられ、差別された。どこでも上級生に逢ふたび敬礼すべきであつた」り、「圭泉寮で毎年一回ストームという行事があつた。上級生達が水道水を私達のベットにまいたりして騒いだ。私はこわくて二段ベットから飛び降りて、足を二週間程の怪我をした」と不快感を露わに述べている。さらに、「日系の人々が満人医師を信用せぬ」と思つた「新京医大の満系卒業生は満人を診療する〔の〕は勿論の事、日本人に対しても同様の診療をなす義務と責任」を放棄している記述がある。これらのことから、大学の内外をとわ

ず、「民族協和」の精神が根を下ろすことは困難であった。

ところで、一九三七年五月に公布された学制は、「国民生活ノ安定ニ必要ナル実学ヲ基調トシテ知識技能ヲ授ケ」ると、⁽³⁾ 実学的な方針を提示しており、それを具体化した「学校教育要綱」の第四項には「実業教育又ハ実務教育ヲ重視シ初等教育ハ之ト密接ナル関連ニ置キ中等又高等教育ハ主トシテ之ニ依ラシム」と、⁽³⁾ 高等教育でも実学をおこなうことが提唱化されていた。

新京医科大学においても、「万事行動第一だ。実践に若き生命を傾け尽すべし」というような学生たちの叫びは、⁽³⁾ 医療の実践が重視されていたことを示唆している。新京医科大学の医療実践には、例えば、ベスト防疫をおこなった際、「注射に関する一通りの予備知識」しかもたず、⁽³⁾ 注射器を使用した経験のない一、二年生たちを防疫注射班に配備し、わずか一日の体験で「注射に対する自信と其のスリルとを味合んとする興味とを持つ事が出来た」と学生が語っているような無謀なやり方も、⁽³⁾ 医療の実践教育に含まれていた。

また、一九四〇年七月、「興安東省保健課の依頼により、同省駆細十一ヶ年計画第一年度実施の駆細治療班」に参加した森田棍太郎ら学生四名は、⁽³⁾ 医療活動を通して、「衛生思想 排除による満洲国最大の国民病たる「トラコーマ」の罹患率並びに之に原因する疾病の如何に多大なるかを痛感し之れが

撲滅は躍進大満洲国にとって最大の急務」と理解し、「トラコーマ」の撲滅のためには「衛生思想の撓まざる普及と因習打破」が必須であると主張している。

新京医科大学の医療実践教育は、医学知識だけではなく、「満洲国」の社会に対する認識も深めたようである。

実践活動を通して、「余りにも理想と現実とが矛盾」していることを自覚し、⁽³⁾ 弱者に同情を寄せるようになった学生は、「吾々が一人前になり彼等の仲間入をさせてもらふ様になった時こそは斯る行為を此の社会から一掃しなければならぬ」と云う確固たる覚悟を決した」と、⁽³⁾ 社会的弱者を救済する正義感を身に着けていた。また、「日常の修養練磨に依つて、苦悶と絶望の淵に沈淪せる」患者を「悪魔の掌中より奪ふ丈で、本分を果したと云ふに止まらず」、「奢侈贅沢の徒」を「正道に引戻すことを督催する」ことも医者⁽⁴⁾の責任であると主張する学生もいた。さらにこの時期、⁽⁴⁾ 猛威を振るっていたペストで「亡くなった同胞の墓が至るところにあることを見て心が痛んだ。政府が防疫のために千万にも下らない巨額の費用を支出しているにもかかわらず、我々の新興王道国家にとって、伝染病の発生率、死亡率の高さは恥ではなかったか」と、⁽⁴⁾ 「満洲国」の防疫対策の杜撰さに苛立ちを隠さない学生もいた。

四、苦悶する医学生たち

「満洲国」の高等教育の方針は、「高等の學術に関する理論及實際を修得せしめ以て國家樞要の人材を養成する」とうたつており、新京医科大学を含む大学生に「鞏固なる國民精神」を具え、國家の中堅になることも要求していた。

しかし、「満洲国」の教育方針と裏腹に、新京医科大学における日本人学生の対応は複雑であった。「皇道樂土建設、礎石ぞとしても選ばれし、至上の幸を高らかに、歌ひて立たん友よいざ」というように「皇道國家」の建設を声高に唱える学生もいれば、「満洲国に医学を修む日系としては内地免狀の件は口にしたくもない」と「満洲国」の医者になることを躊躇している学生もいた。

さらに、「日滿不可分にある満洲国が現在如何なる醫師を」求めているのか、「現在の満洲医学の眞の姿は果たしてどうであるのか、満洲医学の將來は如何なる方向に進まんとするのか、又如何に異変してゆくものであるか」と、「満洲国」の醫師のありかたに疑問をいだき、「満洲国」の医学の將來に不安を感じて苦惱している学生もいた。

関東軍軍医部長の梶塚中将が、「我々にも医者としての國境がなければならぬ」、「満洲国の医者は満洲国の医者らしく、日本の医者は日本の医者らしくやらねばならぬといふ事

を良く知って居らねばならぬ」と訓戒しているのは、日本人の学生たちが「満洲国」の医者として奉仕する決断ができず、苦惱していたことを知っていたのかもしれない。

このように学生たちが「満洲国」の医者となることに苦惱している状況で、「一度太平洋上風巻き起り、大陸に雷雨到る時」が到来した一九四一年末の緊迫した時局に際して、「深く國家の意を體し、新京醫科大學の旗徴の前に、渾然一體となり、一塊の火ともなつて、吾等の使命に邁進しなければならぬ。それでこそ本學が、國家團結の強固なる一分子たり得るのである」と訴える大学学長で学友会会長を兼ねていた山口清治の声は空しく聞こえる。

「現在の本學園に於ては、理想が確然たる意識にまで昂められて」おらず、学生たちの「思想は混沌に陥入り、当面の問題のみが拡大視されていたづらに不安、不満、感傷の中に沈衰して」いたという指摘は、太平洋戦争に突入した時期の、新京医科大学の雰圍氣と学生の意識を吐露したものとといえるであろう。

おわりに

以上、新京医科大学の学友会誌「圭泉」の創刊号を主に利用して、新京医科大学について考察してきた。明らかに

た点は以下のとおりである。

①新京医科大学は、一九二八年に創立された吉林医学校が、「満州国」樹立後に、吉林国立医院付属医学校、新京医学校と名称を変更してきた「国立」の医科大学である。中国人学生が多いわりには、中国人教師が少なく、日本人教師が圧倒的に多く、授業も日本語でおこなわれており、この点に「満州国」の医科大学の特徴をみいだすことができる。「満州国」の医科大学のなかで新京医科大学が最も厳しい入学競争率であった。それだけに学生はまじめに勉学に励み、教師も熱心に教育していたようである。卒業生は「官吏」として「満州国」の国公立の医療機関や教育機関に就職する割合が、他の医学校よりも高く、この点も新京医科大学の特色であった。

②「満州国」の医科大学では実践的教育が重視されたが、新京医科大学でどのように医療の実践教育が行われたのかについては、今のところ明らかにしえないが、「圭泉」創刊号に掲載された社会的実践活動を検討しただけでも、新京医科大学の医学教育が学生たちに大きな影響を与えていたことが明らかにされた。すなわち、医療の実践活動を通して、学生たちは医療の経験と知識を深めただけでなく、「満州国」の衛生政策への疑問・批判、社会問題への関心を養っていた。この点は、今後、さらに深めていかねばならない課題である。

③日中戦争、そして太平洋戦争へと厳しくなる状況下で、

学生たちの心情は複雑であった。一致団結して時局に対応を呼びかける学校当局とうらはらに、「満州国」に奉仕することを決断できず、日本の医者になりたい学生もいれば、「満州国」の医者になろうと決意できない学生もいたし、「満州国」の医者の方々に疑問をいだき、苦悩する学生もいたのである。学生の心情は一樣ではなかった。日本人学生と中国人学生との関係や心情の相違をめぐり出す課題も残されている。

注

- (1) 詳細は、「満州国」教育史研究会『満州帝国文教年鑑』第一次（一九三三年）三四年、エムステイ、一九九三年、一五三頁を参照されたい。
- (2) ほかの五つの大学は、『第二次民生年鑑』によれば、満州帝国建国大学、師範高等学校、奉天農業大学、哈爾濱工業大学、満洲国北滿学院であった（満洲帝国民生部『第二次民生年鑑』、一九四〇年、七三三頁）（満洲国」教育史研究会『統計・年鑑類Ⅲ』、「満洲国」教育資料集成Ⅲ期、「満洲・満洲国」教育資料集成第一九巻、エムステイ、一九九三年所収）。

(3) 棍塚中将「講演」、「圭泉」創刊号、一九四一年八月。

(4) 一九九四年発行の「圭泉」。

(5) 第一期生の王樹青によれば、一九三三年十二月二十七名しか卒業しておらず、在学中に八名が肺結核でなくなり、三名が転学し、八名が落

第で退学したという(一九九四年発行の『圭泉』)。第四期生王瀛によれば、第二期生二十三名が一九三三年十二月に卒業している(王瀛「学生時代の思い出」、一九九二年発行の『圭泉』)。

(6) 『満州年鑑 三』(復刻版)、満州文化協会、一九九九年、三七九頁。

(7) 『満州年鑑 四』(復刻版)、満州文化協会、一九九九年、三六三頁。

(8) 『満州年鑑 五』(復刻版)、満州文化協会、一九九九年、三三三頁。

(9) 第七期が最後の卒業生となった。そのときの日本人学生の卒業証書には一九四五年七月二日に卒業と記されているが、実際には同年三月に一旦全員が仮卒業となった。第七期卒業生の日本人学生三十五名のうち、十一名が日本海軍軍医学校に入学し、残りの二十四名は病院で実習中に鞍山で終戦を迎えたという(島新一「七期―卒業後四五年・クラス会記」、一九九〇年発行の『圭泉』)。

(10) 前掲『満州年鑑 五』、三三三頁。

(11) 武強『東北淪陷十四年教育史料』(第二輯、吉林教育出版社、一九八九年) 五九六―五九九頁。

(12) 詳細は、武強『東北淪陷十四年教育史料』(第二輯、吉林教育出版社、一九九〇年)、三一四―三二五頁を参照されたい。

(13) 前掲王瀛「学生時代の思い出」。

(14) 新京医科大学八期生の加賀誠氏へのインタビューによる。

(15) 王勇錚「私の思い出と雑感」、一九九二年発行の『圭泉』。新京医科大学八期生の加賀誠氏へのインタビューによる。

(16) 創刊号のなかに、「自治の陽光燃え立ち茲に学友会の創設見しより、

既に二年の歳月を経ました」との記事があることから、新京医科大学の学友会は一九三九年に創設されたものと考えられる。

(17) 「各部報告―総務部」、『圭泉』創刊号。

(18) 満洲帝国民生部『第一次民生年鑑』、一九三九年、九頁、三八二―三八三頁、『第二次民生年鑑』、一九四〇年、七三三―七三四頁、『第三次民生年鑑』、一九四一年、四二四―四二七頁、『第四次民生年鑑』、一九四三年、三二四―三二七頁(『満洲国』教育史研究会「統計・年鑑類Ⅱ」)、『満洲国』教育資料集成Ⅲ期、『満洲・満洲国』教育資料集成第Ⅴ、『満洲国』教育資料集成Ⅲ期、『満洲・満洲国』教育資料集成第Ⅴ、十八巻―二十一巻、エムステイ、一九九三年所収)を参照して、筆者が作成した。

(19) 天野二平「我が校」、『圭泉』創刊号。

(20) 宮村研「杏林に学ぶ」、『圭泉』創刊号。

(21) 菊地博「卒業は旧満州の新京医科大学」、一九九六年発行の『圭泉』。菊地博は、長野県上田市東部町の出身で、一九四〇年四月に上田高校を卒業して新京医科大学に五期生として入学している。彼の入学動機は授業料が免除され、手当てまでつくことに「魅力」を感じたほかに、「そのころは国策で大陸へ雄飛する夢をかきたてられていて、『人間至る所青山あり』などという言葉に憧れていました」というように、時局の影響によるものであった。彼は一九四三年十一月に繰り上げ卒業となり、十二月に東京陸軍軍医学校の幹部候補隊に入り、その後、静岡の連隊の軍医見習士官となり、そこで終戦を迎えた。

(22) 満洲帝国民生部『第一次民生年鑑』、一九三九年、九頁、三八四―三八

八五頁、「第二次民生年鑑」、一九四〇年、七三〜七二八頁、「第三次民生年鑑」、一九四一年、四二六〜四二七頁、「第四次民生年鑑」、一九四三年、三一八〜三一九頁（「滿洲国」教育史研究会「統計・年鑑類Ⅱ」V、「滿洲国」教育資料集成Ⅲ期、「滿洲・滿洲国」教育資料集成第十八巻〜二十一巻、エムステイ、一九九三年所収）を参照して、筆者が作成した。

(23) 沈潔「滿洲国」社会事業史」、ミネルヴァ書房、一九九六年、二六〇〜二六一頁。なお、表②の「医員、医師」については、新京医科大学八期生の加賀誠氏から「高等官試験は受けていません。むしろ受ける必要がなかった人、そして勤務先が公立病院でない人に使われたのでは……」という指摘があった。

(24) 前掲王瀛「学生時代の思い出」。

(25) 入江義一「回想—わが軌跡」、日本医事新報社、一九九四年、非売品、一一四頁。

(26) 王瀛「恩師伊藤教授米寿祝賀」、一九九〇年発行の「圭泉」。

(27) 前掲王瀛「恩師伊藤教授米寿祝賀」。

(28) 太田義英「奉山線案内記」、「圭泉」創刊号。

(29) 前掲王勇鋒「私の思い出と雑感」。

(30) 飯尾純三「満人医師」、「圭泉」創刊号。

(31) 東京文理科大学・東京高等師範学校紀元二千六百年記念会「現代支那滿洲教育資料」、培風館、一九四〇年、四一〇頁。

(32) 加藤嘉雄「新学制準備—総合的學校経営の実際」、滿洲帝国教育会、

一九四二年、二〇頁。

(33) 十川彌茂「曠野」、「圭泉」創刊号。

(34) 例えば、一九四一年十月上旬、新京市でベストが発生していたため、新京医科大学は、「一族郎党二百有余を引きつれてベスト防疫陣に馳せ参じ注射班として又は連絡員とし或は助手として悪戦苦闘將に死線を越へた涙ぐましてき奮戦を重ねる事実に一ヶ月有半、此の間貴重な学業からも身をひき只管ベスト防疫の任に」当たったという（伊藤常秋「あるベスト流行の日」、「圭泉」創刊号）。

(35) 前掲伊藤常秋「あるベスト流行の日」。

(36) 森田棍太郎の「夏季興安東省莫力達瓦旗駆細治療班報告」、「圭泉」創刊号。

(37) 「トラコマ」の場合、罹患率は高く、「角膜浸潤、角膜潰瘍、角膜混濁、結膜乾燥症、瞼球癒着症」等の多くの症状が併発していたようである（前掲森田棍太郎「夏季興安東省莫力達瓦旗駆細治療班報告」）。

(38) 前掲伊藤常秋「あるベスト流行の日」。

(39) 前掲伊藤常秋「あるベスト流行の日」。

(40) 幽良「我等の魂」、「圭泉」創刊号。

(41) 王家凱「康德七年防疫鱗片生活」、「圭泉」創刊号。

(42) 前掲「滿洲年鑑 四」、三六三頁。

(43) 山口清治「巻頭言」、「圭泉」創刊号。

(44) 前掲宮村研「杏林に学ぶ」。

(45) 前掲長嶺晋吉「学園の理想」。

- (46) 前掲長嶺晋吉「学園の理想」。
- (47) 前掲梶塚中将「講演」。
- (48) 前掲山口清治「巻頭言」。
- (49) 前掲長嶺晋吉「学園の理想」。